

大使コラム（2013 年 3 月）

3 月のリスボンでは、春の草木が萌えるのと対照的に、このところ寒の戻りが顕著です。朝晩のこの寒さは、3 月初旬としては珍しいようです。ただし、冬が冷たければ桜の開花には良いとのことで、今年は当地の「日本公園」の桜に期待できるかもしれません。

先日、用務で一時帰国したあと当地に戻ると、いつものようにほっとした気分を感じました。東京の寒さのせいで、こちらの気候が温暖に感じられただけが理由ではないようです。仕事柄、これまで色々な国に住みましたが、その中でもポルトガルの居心地の良さは特に印象的です。当国を訪れる日本人がこの国をまた訪れたいと願いながら帰国されるのを多く目にするのも、文化や歴史の魅力に加え、温厚で親切なポルトガル人の社会が我々にも快適だからだと思います。西欧だけでなく、世界各地でポルトガル系の人にお会いする機会がありましたが、移民として成功する上でもこのような国民性は大事だったのではないのでしょうか。移民といえば、経済不況に苦しむ中で海外にいる親族からの送金が増加し、当国経済に多少なりとも寄与しているとのことです。失業率が 16 % にもなり、特に若年労働者の失業率は 25 % を超える事態に、仕事を求めて海外へ出て行く若者も増えているようです。この国の海外との深い人のつながりや移民の重要性を改めて感じました。

ポルトガルの危機は経済の脆弱性が原因で、アイルランドやスペインの問題が不動産バブルの破綻をきっかけとしたものと基本的に異なっています。生産性の向上による経済成長なくして、この国の経済の再生はないのですが、その資金を市場から調達できなくなり、まずは緊縮政策による財政立て直しが必要となった訳です。これは、金融、財政政策を動員できる現在の我が国のケース等と比べても、さらに厳しいことが分かります。

この中で、去る 1 月に 5 年物国債の新規発行が実現しました。昨年 10 月に 5 年物国債の借り換えに成功し、今回は新規発行の成功で、金融市場からの資金調達にさらに実績を重ねました。支援プログラムに関する「トロイカ」の定期審査でも、引き続き当国の努力は評価されています。増税や収入減、失業の増加、福祉など公的サービスの削減等が国民負担をさらに重くし、景気の動向も欧州経済に依存するという弱みもあって、事態は容易ではありません。しかし、不人気の緊縮政策も、金融面では将来につながる成果を生んでいるのも事実です。

また、外交面でも輸出促進や投資誘致のため、緊縮策を補完する努力が進んでいます。経済・雇用省の下にあった「ポルトガル投資貿易振興庁」（A I C E P）が、政権交代で外務省の指揮下に置かれたのは、経済外交の体制作りのためでした。また、ポルトガル語文化の普及機関と海外援助の機関とが統合され、「カモンイス協力・言語院」

となり、文化外交と援助外交が共同して活動する体制も整えられました。外交官の採用でも経済に強い人を重視し、職員の企業研修も強化しているそうです。これらは、ポルトガル政府の経済外交重視への強い意思を示すものでしょう。

その上で、大統領、首相、外務大臣らが手分けして、西欧だけでなく、アフリカ、南米、東欧、中近東、アジアの諸国を頻繁に訪問して来ました。その際、数十人の企業関係者を同行することもしばしばで、国の指導者たちが率先して経済外交に邁進している姿は感銘を与えます。

今月末には、懸案のポルトス外相の日本への公式訪問が実現する運びとなりました。当国外相の訪日は実に7年ぶりのことですが、一昨年は東日本大震災、昨年は日本の政局などもあり、今回ようやく実現することになりました。外相は多くの経済関係者を同行する予定で、政府間の対話のほか、経済関係者同士の会合も準備されつつあります。今年は、ポルトガル人が種子島に来訪してから470周年にあたり、各種の記念行事が続いていますが、今回の外相訪日は右記念行事としても有意義です。外相訪問が両国関係の発展に新しい一歩となるよう、準備を進めています。実のある訪問が実現し、さらに東京では早咲きの桜が一行の訪日に花を添えてくれることも期待しています。

時節柄、皆様にはご自愛のほどをお祈りいたします。